

公開講座

藤原教授の英語のはなし 第11弾

「英語になった日本語」

講師：藤原 保明

(筑波大学名誉教授)

6月20日(土)

茗溪会館にて

「ハラキリ」、「ゲイシャ」、「ツナミ」などは古くから英語になっているが、最近はどんな語があるのか探してみた。

1 最新の情報を英語辞典から探る

世界最大の英語辞典『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*) (1989年に第2版刊行、以下OED²)には約60万語が収録されている。最も古い時期の古英語の語彙は約5万語であることから、千年ほどの間に英語の語彙は55万語増えたことになる。そのほとんどはラテン語、フランス語などの外国語からの借入による。イギリスでは、宗教改革、ルネッサンス、産業革命などにより、新たな物や概念を表す必要が生じると、新しい語が作られ、外国語が借入された。

日本語も英語の語彙の増強に貢献してきたことから、その実態を探ってみた。OED²は刊行後26年も経過し、借入語の最新情報を提供できないことから、中規模の辞書ではあるが約35万語を収録している最新の*Oxford Dictionary of English* (2010年に第3版刊行、以下、ODE³)から日本語に由来する英語を抽出し、分析を行った。

2 鎖国体制確立以前

江戸幕府の鎖国以前に日本にやってきた西洋人は、1543年に種子島に漂着し鉄砲を伝えたポルトガル人、その6年後の1549年に日本にキリスト教を伝えたスペイン人宣教師フランシスコ・ザビエル(1506-52)、および、1600年にオランダ船リーフデ号で豊後に漂着したイギリス人航海士ウィリアム・アダムズ(1564-1620、日本名、三浦按針)とオランダ人のヤン・ヨーステン(Jan Joosten, -1623、日本名、耶揚子)など、ごく少数であった。しかも、ザビエルは故国への帰路に死亡し、アダムズとヨーステンは徳川家康の外交顧問として活躍したが、アダムズは平戸で病死し、ヨーステンも航海中に難破し、日本語を広く海外に広めることはなかった。

このような状況により、鎖国体制が確立する1639年以前に日本語がイギリスに伝わり、英語として用いられ

ることはごくまれであり、(1)のような日本語が英語となったのには特別な理由がある。(1a)のbonzeはザビエルの手紙に記されていたものであり、後にこの手紙は英訳され、『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』として出版された。次に、(1b)の6語は平戸商館長を務めたイギリス人のリチャード・コックス(1566-1624)の『イギリス商館長日記』(1615-22)に由来する。この日記は当時の商館の経営状態や日英交渉を知る貴重な資料であり、その中のいくつかの日本語が英語となっている。一方、(1c)のinroはアダムズがイギリスに送った手紙に記されていたものである。

(1) a. bonze 「坊主」(1552、英訳は1677)

b. shogun (1615), kami 「神」, s(h)amisen, tabi, tatami (1616). tai 「鯛」(1620)

c. inro 「印籠」(1617)

3 鎖国から日米和親条約以前の215年間

徳川幕府の鎖国体制が確立すると、日本で唯一の貿易地は長崎の出島のみとなり、平戸にいたオランダ人はここに移住させられた。それ以降、日米和親条約を締結する1854年までの215年間、出島に出入りする西欧人だけがヨーロッパに日本の文物を伝え得るという状況であった。

それゆえ、この間に英語になった日本語は(2)に示したごくわずかなものに限られた。ちなみに、(2c)の17の日本語は1727年から英語として用いられ、しかも数が他の年よりはるかに多いが、いずれもドイツ人医師で博物学者のエンゲルベルト・ケンペル(1651-1716)の『日本誌』に依存している。彼はオランダの東インド会社に医師として着任し、その後、日本に滞在し(1690-92)、この間に日本の社会・政治・宗教・動植物を観察し、それを書物に著し、ヨーロッパ人の日本研究、日本観に大きな貢献をした。

(2) a. 1687年: sake

b. 1696年: soy 「醤油」

c. 1727年: ad(z)uki, ginkgo 「銀杏」, hinoki, kaki, kana, katakana, koi 「鯉」, matsuri, mikado, mizuna 「水菜」, samurai, satori 「悟り」, Shinto 「神道」, shoyu, torii, tsubo 「つぼ」, zazen

d. 1822年: hiragana

e. 1823年: zori

f. 1837年: akebia 「あけび」

g. 1839年: daimyo

ちなみに、東インド会社は、17世紀初頭にイギリス、フランス、オランダなどの西欧諸国が胡椒や茶などの物産をアジアからヨーロッパに輸入することを主な目的として、特別な許可を与えて設立させた会社の総称であり、

当時、日本にやってきた西欧の商人はたいていこの会社を拠点としていた。

4 開国から世界大戦終了までの 91 年間

300 年にわたる鎖国体制が崩壊すると、欧米諸国との交流が盛んとなり、多くの文物や概念が日本に流入し、日本の物産・風俗・習慣なども海外に広まっていった。英語に借入される日本語の数も開国以前と比較して飛躍的に増大した。

このことは (3) のように 10 年刻みで表記すると明白となる。すなわち、開国から明治維新による近代国家が成立する 1867 年までの 15 年間では、(3a, b) のわずか 6 語であった借入日本語は、(3c, d, e) のように次第にその数を増やしていく。これらの日本語のほとんどは日本特有の文物を表すものであり、またこれらの語の紹介には特定の個人ではなく、かなり多くの英米人や日本人が関わっている。

(3) 1854~1899 の 45 年間

- a. 1850 年代 : hara-kiri, tycoon 「大君」, hakama
- b. 1860 年代 : shakudo 「赤銅」, hibachi, sasanqua 「山茶花」
- c. 1870 年代 : ronin, seppuku, jinrikisha, ju-jitsu 「柔術」, raku 「楽(焼)」, renga 「連歌」, shiitake, tanka 「短歌」, ukiyo-e
- d. 1880 年代 : sashimi, shoji, sumo, tofu, Satsuma 「薩摩(みかん)」, netsuke 「根付」, kombu, sensei, tsukemono, kimono, tansu, romaji, judo, tsuba 「鐔」
- e. 1890 年代 : kakemono 「掛け物」, geisha, katsuobushi, sika, nori, banzai, kudzu 「葛」, shakuhachi, sushi, katsura 「桂、鬢」, kamikaze, tsunami, bushido, haiku, hokku 「発句」, kabuki

ところが、20 世紀に入り、日本が欧米列強と共に軍国主義化し、2 度の世界大戦に関わるようになると、英語に借入される日本語の数は (4) のように伸び悩む。

(4) 1900~1945 (終戦までの 45 年間)

- a. 1900 年代 : wasabi, tsutsugamushi 「つつがむし(病)」
- b. 1910 年代 : shubunkin 「朱文金(金魚の一種)」
- c. 1920 年代 : kanji, sukiyaki, tempura, kendo, origami
- d. 1930 年代 : onsen, wabi 「侘び」, kyu 「級」, zaibatsu, shochu, sumie 「墨絵」
- e. 1940 年代 : dojo, nisei, sansei, tosa 「土佐(犬)」
* medaka (20 世紀前半)

5 終戦から 20 世紀末までの 40 年間

日本が敗戦の痛手から徐々に立ち直り、経済復興を成し遂げ、再び国際社会の仲間入りをするようになると、英語となる日本語の数も (5a) のように増え、20 世紀後半になると、(5b) のような日本食ブームの先駆けとなる語や日本古来の武道に関わる語が増える。

- (5) a. 1945~59 : mama-san 「女将」, bonsai, hibakusha 「被爆者」, keirin, judouka 「柔道家」, pachinko, kata 「(武道の)型」, karate, aikido, sumi, keirin
- b. 1960~85 : chichi 「(女性の)乳」, kanban, nashi, yakitori, ryokan, yakuza, karateka 「空手家」, shiatsu, karate-chop, nunchaku 「ぬんちやく」, shabu-shabu, karaoke, maki zushi, tamari 「たまり(醤油)」, anime, enoki 「榎(茸)」

6 21 世紀の始まりから今日まで

ODE³ の編集の最終段階の数年間に日本語が英語になっていたとしても、2010 年の発行日までに辞書に盛り込めなかったと思われる。ただし、(6a) の 2 語は ODE³ に収録され、21 世紀初頭と明記されていることから、出版の 2~3 年ほど前の 2000 年から 2007~8 年の間に英語化したと考えられる。

- (6) 21 世紀初頭 : kakuro 「カクロ」(数字のパズル。<加算+クロス), sudoku 「数独」(パズルの一種。<数字+独身)

一方、OED² に記載がなく、ODE³ には借入の時期が記されていない日本語は 51 例ある。これらの語が英語となった時期が特定できれば、英語における最近の日本語の受容の様子がより詳しくわかると思われる。幸い、これらの語は ODE³ に盛り込まれていることから、1986~7 年頃から 2007~8 年の約 20 年間に英語となったと推定できる。

さらに幸運なことに、ODE³ の初版に当たる *The New Oxford Dictionary of English* (以下、NODE) が手元にあり、今回これが強力な情報源となった。NODE は 1998 年に出版されたが、その後この辞典は ODE と名称が変えられ、2010 年に第 3 版が刊行された。それゆえ、借入時期が不明の 51 語のうち、NODE に収録されていないものは 1995~7 年以降に新たに英語となったとみなせる。

そこで、51 語を (7a, b) のように区分した結果、1986~7 年頃から 1996~7 年頃までの約 10 年間は、(7a) の例から、日本食や柔剣道・相撲などの武道、および盆栽、さらには高度成長を続けていた日本企業の経営の影響がかなり強かったことがわかる。ところが、それから

10年くらい経つと、(7b)のように、日本食ブームや武道は根強い影響を維持し続けているが、盆栽や企業経営の分野はほとんど影響を及ぼさなくなったといえる。

- (7) a. 1986~7年頃から1997~8年頃までの約10年間
- i. 食品・料理: arame (海藻), daikon, gobo, mirin, miso, ramen, wakame
 - ii. 武道: ippon, kumite, oshi, rikishi, tachi, tanto, wakizashi
 - iii. 植木: hiba, keaki
 - iv. 商工業: kaizen, keiretsu, sogo shosha 「総合商社」, sokaiya
 - v. その他: gaijin, issei, juku, manga, ninja, ninjutsu, otaku 「おたく」, reiki 「霊気」, ryu 「流(派)」, seiza
- b. 1996~7年頃から2007~8年頃までの10年間
- i. 食品・料理: bento, edamame, hamachi, kaiseki, ponzu 「ポン酢」, reishi 「灵芝」, seitan 「植物性蛋白質」, shiso, tataki, toro, umami 「旨味」, Wagyu
 - ii. 武道: budo, dohyo, kyudo, mawashi
 - iii. 植木: なし
 - iv. 商工業: なし
 - v. その他: butoh 「舞踏」, hikikomori, kawaii, keitai, robata 「炉端」

V まとめ

過去600年ほどの間に英語になった177の日本語を分析した結果、その多くは日本特有の文化に関わる語であり、それゆえ、英米人は自国にない文物や概念を日本語から積極的に借入していたことがわかった。同時に、これらの日本語を日本人の目で見ると、過去の日本の国情を知る貴重な情報源となっていて、鎖国や戦争は異文化交流を妨げる要因となっていたこと、および、国同士の交流が盛んになると、そのことが言葉に直接反映されるということがよくわかった。今から10年程の後にODEの第4版が出版されれば、その中の借入日本語を見れば、2010年以降の日本がどのような分野で欧米に影響を与えたかがわかるであろう。楽しみに待ちたい。

講演後の質疑応答も活発で、楽しいひと時であった。